

Title	吉田璋也論
Author(s)	猪谷, 聡
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53320">https://doi.org/10.18910/53320</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 吉田璋也論

猪谷 聡／大阪大学大学院

民芸運動は大正末年／昭和初年より始まった。運動の提唱者である柳宗悦が「古作品を味ふと同時に、新しく作るといふ任務を帯びている」と述べているように、かつてつくられた民芸品の調査、保存、展示という活動とともに、すぐれた民芸品を今後あらたにつくりだす活動が民芸運動の目的とみなされていた。したがって、運動の性格はありし日の民芸に対する懐古の色に染められたものではなく、きわめて将来性に富んだものであったといえよう。民芸品をあらたにつくりだす活動は、新作運動と呼ばれている。本発表においては、新作運動において吉田璋也の果たした役割に注目し、おもに鳥取での活動について扱った。

吉田璋也は民芸運動に関わったメンバーの一人である。本業が医者であった吉田は、1931（昭和6）年故郷である鳥取に医院を開設し、また戦時中には軍医として中国に派遣された時期もあるが、戦後においても医業と両立しながら、鳥取の民芸運動を推進してきた。1932（昭和7）年に設立した民芸品の販売店である「たくみ」をはじめ、民芸品の保存および展示施設である「鳥取民芸美術館」、そして民芸品の使用モデルを示す「たくみ割烹」の3つはいずれも吉田が手掛けた活動であり、現在も続いている。

鳥取における吉田の民芸運動は、牛戸窯の再興から始まった。全国的な民芸運動の展開から見ても最初に再興された民窯である牛戸窯において、1931（昭和6）年に民芸品の試作が行われた。この試作は、需要を失いつつあった民芸の製作を生活様式の変化に対応さ

せる意図を含んでいた上に、新作運動という活動の可能性を問うものでもあった。吉田は「緑黒釉掛分皿」など牛戸の伝統的な技法を生かした作品を考案し、古くからつくられてきた日本各地の民芸品、および河井寛次郎、濱田庄司、富本憲吉などの作品を手本に選んだ。

牛戸での試作は、かつての製作と同じ胎土と釉薬を用いることが可能だったことや、工人が伝統的な技法が伝承していたため、良好な結果を生んだ。新作運動の始動を決めた吉田は陶芸のみならず、漆工、木工、金工、石工、染織という様々な分野に渡って関わり、工人同士の組織を結成させた。吉田が工人との関わりにおいて製作の現場で果たした役割は、工人が模倣すべき手本の提示と工人の作品の判定である。この製作方法は吉田のものを見る眼を基準とし、工人たちの吉田への全幅の信頼を前提としているだろう。各地で新作運動の機運が高まる中、鳥取は先駆的な役割を果たすこととなる。

吉田の活動を高く評価した柳は「民芸の将来に対して、実際具体的な仕事をなすつゝある点で、吉田くんの方に及ぶものはない」と述べている。吉田と柳のつながりは、民芸運動の開始以前からあり、吉田が柳と常に近い関係にいたことは、民芸運動のきわめて初期から関わっていたことから伺われる。関わった人物で知られているのは実作者が多く、例えば、バーナード・リーチや濱田庄司は、個人作家と呼ばれる立場にいた。それに対して、吉田は民芸品をみずからの手でつくりだしたわけではない。吉田は自身を、「世話人」

または「監督者」、後年は「プロデューサー」と呼んだが、その立場は製作の現場にいながら、民芸品のつくり手と使い手の間にあるとみなしていた。新作運動は個人作家と工人との共同作業が指針とされたが、各地によってその進みは異なり、個人作家と工人の関係に関しては様々な見解があった。そうした中で、吉田のとった立場は鳥取の新作運動の特徴をより強く現わしている。

鳥取の新作運動が他の地域と異なった点に販売活動がある。鳥取において「たくみ」を設立させた吉田は、山陰の民芸品の集荷配分活動を展開し、やがて1933（昭和8）年東京支店を開き、全国の民芸品を担当することになった。民芸品を扱った販売店は、「たくみ」だけでなく、東京では「水澤」「港屋」もあった。しかし「たくみ」は生産活動と販売活動を結びつけ、民芸品の流通を強く意識した活動を行った。それは、新作運動を維持するには製作と販売がともに展開することが不可欠だとする考えによる活動であり、民芸品の需要の確保、延いては工人たちの継続的な製作を吉田は図ろうとした。さらに百貨店への出店により民芸品の販路の拡大に努めたことや、「たくみ割烹」のように、民芸品を実際に使用する例を見せることで使い手をうみだす施設の考案は、同じく流通性を視野に入れた活動だといえる。

製作の監督と作品の販売を担った吉田の新作運動は、柳の民芸理論に対し、忠実なまでに実践しようとしてきた。工人の仕事が続く環境を整え、技術的に熟練する過程を保証しようとする方法は、民芸理論に基づいた考えである。繰り返し同じものを迅速かつ大量に作りつづけることによって作品におのずと美が宿るに至るという性質を、柳は民芸の特徴に挙げている。しかし、そうした理論に忠実であろうとする吉田の実践はいくつかの障害

に直面した。

第一に、価格の問題である。民芸品が高価である状況は、経済的な問題にとどまらず、民芸品は一般の人々が普段の生活で使う日用品だとする主旨とは異なり、民芸運動の目的に関わる問題であった。安価な科学素材による機械生産が進む中で、天然の素材や手仕事を求める運動は、必然的に高価にならざるを得ない民芸品をつくりだした。運動の内部からも批判を受けたこの問題に対して、吉田は機械の導入や科学素材の使用を検討するといった対策も考案したが、決定的な解決は困難であった。

第二に、論理的矛盾という問題である。柳の理論において民芸の製作とは、作為に囚われないものづくりを志向している。民芸品をつくることを明確に意図しながら美しくつくろうとする意識は、ほんらい民芸の製作とは相容れないものである。ましてや新しくつくろうとすることは、きわめて意識的な行為であり、作為的なものづくりといえよう。したがって、新作運動とは論理的には矛盾した活動であった。この矛盾は、既に1927（昭和2）年京都での上加茂民芸協団の結成において、柳自身が指摘していた。協団の試みは2年後失敗に終わっている。つまり、吉田の新作運動とは論理的な矛盾と失敗の前例をあらかじめ承知した上で始められたものであった。

吉田の実践とは、そういった障害をいかにして打開するののかという実験的な過程であったといえよう。民芸運動の発展には「プロデューサー」の存在が必要だと主張した吉田の独自性を探るならば、その過程に注目しなければならず、そこに民芸の理論に対する実践者としての解釈があると思われる。